
俺こそが名脇役！

ふっしー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺こそが名脇役！

【NZコード】

N7768Y

【作者名】

ふつしー

【あらすじ】

恋愛に憧れる高校生、里美公太はなんと今年に入つてすでに告白四連敗中。それも決まって「あなたは違う」と言われてしまう。告白失敗に呆然とする公太の前に突如現れた黒い巫女服の美少女。彼女の名前は朱夏。縁結びの神を奉る巫女だという。朱夏が語りだした公太の告白失敗の理由。それはなんと公太の主人公時間が無くなつたことが原因だった。主人公時間とは、文字通り人生の間で人が主人公になつていられる時間。人生の主人公から降ろされた公太は一度と恋愛が出来ない体になつてしまっていたのだ。だが、主人公

に戻る方法が一つだけ存在すると朱夏は語る。その方法とは『他者の物語に脇役として登場する』こと。脇役が他の主人公にとって、重要な存在となり人気者になれば、 спинオフとして主人公に返り咲けることがあるというのだ。この話を聞いた公太は、巫女の朱夏、親友の優と共に、主人公に戻るために脇役として他の主人公の恋愛のサポートを行うことになった！ 脇役視点で物語を描くドタバタ学園ラブコメディー！

プロローグ

「俺と　付き合つてください……！」

……ふふふ……、完璧だ……！！

金曜日の放課後。
一週間の中で最も気の緩むこの時間帯に、俺こと里美公太れとみじゅうたは人生の中でも最も緊張していた。

静まり返った屋上で、思春期の男女が一人きりで向かい合つている。

聞こえるのは、風の音と微かな生徒の声と、そして俺の心臓の鼓動。

神々しくも切なく輝く夕日をバックに、俺は目の前の彼女に告白した。

了承を得るために差し出した右手。

角度、スピード、タイミング。まるで計算し尽くしたかの如くしなやかな動き！

それに加えて俺の表情。

恐怖、期待、緊張、その全てに堪え、必死に真剣な顔を作り出す。俺は本気だと意思表示を視線で行う！

さぞかし爽やかで、誠実な印象を与えたことだろう！

彼女の表情はどうだ!? 見てみろ！ 頬が赤らんでいるではないか！

これも俺が今まで実行してきた作戦の賜物だと言えよう！ それはもう苦労したんだ！

出会いからこの告白まで、俺は様々な手を尽くした！

彼女の情報を得て、周囲の人間関係に根を回し！ 同情を誘い味方を作つた！

彼女の両親から姉妹、親友に至るまで！ クラスの皆からも応援

された！

屋上に彼女を誘つたとき、クラス中から黄色い悲鳴が飛び交つた！
その時の彼女は、恥ずかしそうにしながらも、期待するような視線をこちらに送つてきたほどだ！

俺、そしてクラスの誰もが、新たなカップルの誕生を確信していった！

そしてこの告白…これで断る女子なんているはずもない…！
恥らう彼女。いやあ、焦らしてくれるぜ…！
しばらくすると、彼女はおずおずと口を開いた。
彼女の第一声。それは栄光の告白了承に違いないのだ！
「あ、答えてくれ…！」

「『めんなさい。あなたじゃないの』

うんうん。そうだわ、そうだわ。こんな雰囲気の中、断る女子なんて

「え…！？」

落ち着け、俺。何かの聞き間違いだ。そうだ、そうに違いない。
「『ごめん！ よく聞こえなかつた！ もつ一度お願ひ…！』
……今度こそ、しっかりと聞くぞ…！ まあ、もう一度…！
「ごめんなさい。あなたは違うから…」
ふふん。そうね。やっぱり聞き間違いじゃなかつた…って。
「ええ…？ えええ…！…！…？ ど、どうして…？」
「『めんなさい…。さよなら』

俺の言葉を完璧に無視し、彼女は俺に田もくれず屋上から走り去つて行つた。

後にはポツンと俺一人。

「…何故だ…？ こんな馬鹿なことが…！？」

まさかの告白拒否。完全に想定外だ…。

「あ、ありえないぞ…？ 一体何が起つたというんだ…？」

告白する前の彼女は誰が見たってOKだった。それなのに一体どうして！？

「俺、何か間違っていたのか！？ 知らないうちに彼女の嫌がるようなことを……？」

いや、それはないはずだ！ 彼女の性格、思想、趣向、人間関係や家族構成に至るまで徹底的に研究し、彼女の目を惹き、好みそうな行動をしていたんだ。

地雷を踏むようなことは決してなかつたはず！

「なのに、どうしてこうなった……」

「あれ？」

俺はしばらく考えて、一つ気になることを思い出していった。
確かに以前にもこんなことがあったよ'つな。……。
あれは確か……前回の告白のときも……。

数ヶ月前

「俺と付き合つてください！！」

「ごめん、あんたじゃないから」

「なんですよ――――――！」

……つてことがあつたよ'つな。

「デジヤヴ、なのか……？」

そういうえば最近はよく女の子に振られる。

昔の俺は、言つては何だがモテモテだったんだ。

常に彼女はいたし、別れてもすぐに違う彼女が出来たつてもんだ。そんな俺が、今はこの有様だ。告白しても実らない。盛者必衰つてか？ やかましい！

今年に入つて、なんと4連敗中。しかも全部決まって

『あなたじやないの』

と言われて断られている。流行つてゐるのか……？

「あー、また振られたか……」

ともあれ振られてしまつたものは仕方ないよね。

「まあいや！ 次の恋を探そう！」

と口にして決意を固めた その時だった。

「 あなたには、もひ無理よ 」

俺しかいなはずの屋上に、ビルからともなく凛とした声が響き渡つた。

「だ、誰だ！？」

驚いた俺は声のした方へと振り向く。屋上の給水タンクの上にその姿はあつた。

「あ、あんた誰だ！？ 一体そこで何してるんだ……！？ ……つて、委員長！？」

どんな展開！？ なんで委員長があんなところに！？

俺は驚愕を隠しきれなかつた。その見覚えのある彼女の名は縁朱えにし夏。

我がクラスの委員長で、活発な性格と、美麗な外見で、クラスどころか学校中から人気を集めているアイドルなのだ。

だが、その彼女が何故か巫女さんスタイルでそこに立つていたのだ！！

それだけではない！ 特筆すべきはその巫女服！

真っ黒な巫女服だつて！？ そんな巫女服、見たことないぞ！？ 「なんで巫女さん！？ しかも黒だと！？ ……いや、今それはどうでもいい！？」

どうでもいいわけないけどね。実はすぐ一氣になつてゐる。

「委員長、今のセリフ、一体どうこうことだー」

「その答えは どうつーーー！」

「 ……飛んだだとうーーー！」

委員長は得意げに給水タンクの上からジャンプした！

「あ、危ないってーーー！」

と、俺は注意したものの、黒巫女服をはためかせ空を躍る姿はとても美しく、つい見とれてしまっていた。……のだが

「…………」

予想通りとこうべきか、着地失敗。

「あひやー…………。あれば痛い…………」

委員長はしばらく悶絶していたが、俺の視線に気づき、わっと立ち上がりこりから面向き直った。

「やり直しよ！」

「…………何を…………？」

「あなたには、もう無理よ…………」

おお、今こけたことを完璧になかったことにしている……なんてスルースキルだ！

…………って言つてゐる場合じやないよね。

「なあ、委員長。それってどうこいつことだ？」

「あなたにせ、もう無理なのよ…………」（ナリナシ）

「…………」

…………マジで最初からせぬのかよ…………。

「…………」

「…………」（ウルシ）

こや、そんな涙目にならなくても……。どれだけ恥ずかしかったんだよ…………。

仕方ない、少しだけ付き合つてやるか…………。

「なんで巫女わんー？ しかも黒だとー？…………こや、今それはどうでもいい！ 委員長、今のセリフ、一体どうこいつことだー？」

…………でセリフ合つてたよね？

「どいつもこいつも、あなたはもう一度恋愛することができないって。そう言つてるのよ」

あつけらかんと言い放つ巫女わん。いや、委員長。セリフは合つてたみたい。

バックには夕日。正直、絵になるよなあ。……着地に成功してい

ればもうと凄かつたのだろうけどね。

……いや、違うだろ俺！

今、とんでもない事を言われたぞ！？ 僕はもう一度恋愛が出来ないって！？

「あなたはもう一生恋愛することが出来ない」

「生つて……。もしかして死ぬまで？」

「そ。死ぬまで」

言い切られた！？ 納得いかんぞ！？

「なんでだよ！ どうしてお前にそんなことが分かるんだ！？」

「見えるのよ。私には」

薄つすらと笑みを浮かべる巫女さん。瞳には涙が浮かんでるけど。やっぱり痛かつたんだなあ……。

でも全力で耐えている。口に打った場所をちょいちょい気にする姿が実に可愛らしい。

黒巫女服も間近で見ると迫力あるね。うん。とても似合っている。しかも良いにおいがするし！

ショートヘアも意外と巫女服とマッチしてるし。

薄つすらと膨らむ胸も うん。これがまあまあかな……

察しよひ。

思わず顔を緩めてしまつ俺。しょうがないよ。だつて可愛いんだもん。

……つて俺はこんなときに何考へてるんだー。今はそれどころじゃないだろ！？

でも可愛いデヘヘ。

「つてこと」

「…………フオオオオオ…………」（葛藤中）

「ねえ、ちゃんと聞いてるの？」

「もちろんさ！」

嘘です。半分くらい聞いてませんでした。

「そう。じゃあ話を続けるわね。それで私には人の“主人公時間”

を見ることが出来る能力があるの」

「へー、見ることが出来るんだー。すげいねー。」

「…………って主人公時間って何よ！？」

「主人公時間っていうのは、文字通り人生の間で主人公になつていつられる時間のこと。主人公時間は誰もが持つていて、その間はとにかく異性にモテるの。でもあなたはその主人公時間を」「な、なんとなく次のセリフが分かるぞ。もの凄く嫌な予感。

「全部使い切つてしまつたの」

「なんだって…………？」

予想通りすぎるーーー！今までモテモテだつたのはそういう理由だつたのか！？

…………つて、おいおい待て待て落ち着け俺。まだ慌てる様な時間じゃない。

いくら可愛いとはいえ、このこの巫女さんの言つことを信じりゆつてのか？ そんなオカルト無理があるぞ？

「…………なあ、その主人公時間って、本当にあるのか？」

「あるわよ。現実にあなた、たつた今振られていたじゃない」「なぬ！？」

「お主、見ていたと申すか！？」

「ええ、惜しかつたわね。主人公時間中だつたら、間違いなくお似合いのカップルになつていたでしょうに」

チクショーフ！ やつぱりそうだつたのか！ お似合いのカップ

ルだつたなんて……。なんてこつたい！

「ちなみに、過去3回全部見てたわ」

「なんだつて————！」（二回目）

なんかストーカーまがいだな！ でも可愛いから許しちゃう不思議！！

…………一度目の絶叫。さつきから叫んでばかりだな俺！ 喉痛い……。

「それに全てこう言われてたでしょ？ 『あなたは違う』ってね」「何故それを！？」

図星だつた。過去全て例外なくそういう言われていたのだ。

「これはね。あなたは主人公とは違つて、そういう意味なのよ？
ヒロインはいつだって主人公と恋実るものでしょ？」

そうか。だから今まで同じセリフで振られたわけね！　なるほど、納得！！

…………するわけがなかろうー！　すると俺はもつ一生恋愛が出来ないってのか！？

「…………なあ、どうにかなる方法はないのか？」

俺はすがりつくような田線を委員長に向ける。

「ないわ」

「即答！？」

視線すら合わせてくれない！？　血も涙もねーのか！？

「…………ダメだ……。もう死のう……」

「…………と、言いたいところだけど、…………つて、聞いてる？」

委員長が何か言つてたみたいだけど、俺はすでに現実から逃避していた。

「もうダメなのー！　一生童貞なんて、ボクには耐えられないのー！」

「あのー、もしもし？」

「もうボクに構わないで！　もつ決めたのー！　死ぬのー！　飛び降りるのよー！」

「…………」（イラッ）

「いやあー！　止めないで！　ボクを止めないでえーーー！」

「…………いい加減にしない」と一生童貞にするわよ？

「すんませんふざけすぎましたゆるしてください」

一気に現実に戻されたぜ……。死ぬ気なんてありませんよ？　ちよつとふざけただけです……ん？

「『と、言いたいところだけど』つてことは……もしかして続きがあるの？」

「あるわよ！　聞くのー？　聞かないのー？」（イラッ）

「聞きたくに決まってるー！」

「次ふざけたら一生童貞だから」（一ツ「コリッ）

委員長は笑顔ながらも眉毛を引きつらせていた。笑顔が怖いとはこのことだ……。

そんなに怒らなくてもいいじゃない。ぐすん。
でも怒った顔も可愛いなあフヒヒ。

「あなたはこれから脇役として生きていくのよ

「……脇役、だって……？」

「そう。物語には必ず必要となる脇役。それをこれから演じていくの」

「どういうこと？」

よく判らん……。

「あなたはすでに主人公時間を使い切った。つまりあなたには主人公になる力が残っていない。それでも主人公になりたい。そう思うなら方法は一つ。他者の物語に入つて脇役を演じること

「他者の物語？ 脇役を演じる？」

「主人公の人生に大きく影響を与えるような名脇役は、それなりの力を得ることが出来るわ」

「つ、つまり……どういうことだつてばよ……」

俺の頭上には“？”マークが大量に浮かんでいることだろう。

「簡単な話、他者の物語に入り込んで活躍し、人気者になればいいつてこと」

「人気者になると、どうなるんだ？」

「例えばドラマの脇役が人気になれば、その脇役を主人公にしたスピノオフ作品が作られることがあるでしょ？ それと同じことね」

「ふむ。なるほど、実に分かりやすい。」

「判つた。でも一体どうやって脇役になればいいんだ？」

「これから主人公時間を迎える人と仲良くなつて、恋愛の手伝いをすればいいの」

「そういうことね」

「よくあるパターンで安心した。……よくあるのか？」

「他者の物語にどんどん入って活躍すれば、いずれ спинオフが作られるかもしない。でも、それはとても大変なことよ？ 主人の期待、信頼に全力で答えないといけないのだから。あなたはどうする？ やつてみる？」

「どうやら俺の主人公時間はもう無いらしい。このままだと一生独身だって！」

「そんな人生はまっぴらご免だ！」

「ならば答えはひとつしかないだろう！…」

「やるに決まってるだろ！ 名脇役になつてやるぜ！…」

「なんとしても主人公に戻つてやる！…」

「それに脇役つていつても、ただ恋愛成就の手助けをするだけだ！」

「なんてことはない！ …はず！」

「……ん？ 不意に疑問が俺の脳裏をよぎった。

「なあ、なんで俺に主人公時間がないこと、教えてくれたんだ？ お前にとつてはどうでもいいことだろ？…」

「ええ、確かにどうでもいいわ」

「……なかなか辛口な巫女さんだな。そこがまた味がある…」

「でも、あなたには興味があるの」

「俺に興味！？」

「うはっ！ 久々に俺の青春が来たか！」

「あなた、色々と雑用してくれそうだからね」

「……そういうことね。まあ期待はしてなかつたよ。何せ主人公じゃないもんね……。」

「私は縁結びを司る神様の巫女なの。我が家は代々縁結びの神様を奉つていて、神様の手伝いをすることが仕事なの。でもね、最近仕事が滞っちゃつて。一人では限界を感じたから、あなたに手伝つてもらいたいの。それがさつき言つた『脇役を演じること』。それであなたは主人公に戻れる。私も楽できる。一石二鳥だとは思わない？」

「なるへそ。そういうことだつたわけね？」

ふーむ。要するにバイトみたいなものか。給料はお金の代わりに主人公時間。

「では来週から行動開始よ！ 手順や注意事項はその時に伝えるわ」

告白失敗、衝撃の事実から一転、この急展開。

いやあ、人生ってどうなるか分からないのですねえ……。

そんな俺の人生よりも、一つ気になっていたことがある。

「ところでさ、何で巫女服着てるんだ？ しかも何故黒？ 神様に仕えているからとか、なにか複雑な理由が？」

「 ただの趣味よ……」

「なんだって…………」（二回目）

一度あることは、やつぱり三度あつたね。三度目の正直なんてことわざは知らん。

第一話 巫女さんは委員長

「ふわあ～～～」

主宮高校に通う俺、里美公太は、人気の少ない朝の教室で、恥ずかしげもなく大きな欠伸をしていた。

ね、眠すぎる……。昨日、寝たの三時だもんな……。そりや眠いって。

なんだか考え事が多くてね。特にここ最近、色々とありますぎて……。告白失敗とかね。それと

委員長が巫女さんだったりとか……。俺が一度と恋愛できないのだとかいのだから……。

なんだかんだでショックが大きかったんだよね。だからこそ、今日は早めに登校してきたわけだし。

そうだ、先週の巫女さん。彼女の話をしよう。彼女は……って、ちょうどいいときに登校してきた。

「おはよう、公太」

田の前に立つ女子の名は縁朱夏。^{えにしじゅか} 我がクラスのクラス委員長を務めていて、顔良しスタイル良し、性格良しの黒髪短髪の似合つ、学校中の人気者だ。

「公太。 判つてるでしょう?」

自覚しているのかつていう田ですね……。もちろん判つてますよ！ 今日から脇役人生スタートなんでしょう？

「私が巫女コスプレをしてたこと、喋つたら

殺すわよ？」

「そつちの話！？ あれ、すゞく良かったのに……。出来ればみんなに広め」

「判つてゐるわよね？」（ニシコツ）

「……はい」

無意識に首が縦に振幅していた。怖ええ……。話を変えよ！……。

「委員長。先週言つていた手順や注意つて、一体何なんだ？」

「私のことは朱夏でいいわ。これからはパートナーだもの。私もあなたのことばは公太つて呼ぶから」

「いきなり名前で呼び合つだと！？ なんてハイレベルな！」

「それはさすがに恥ずかしいぞ！？ 委員長」

「……何照れてるの？ これからは当分仕事を手伝つてもらわなければならぬし、何より公太。あなたはもう主人公じやないのよ？ 照れる要素ないでしょ」

「ふぐつ！」

「だから安心して名前で呼びなさい」

「……わかつたよ、朱夏……」

「理解できたならよろしい。詳しいことはまた後で話すわ。とりあえず主人公を見つけないとね。今はまだ見当たらぬけど近いうちに現れるはず。主人公が現れたら、私はすぐに分かるから、見つけ次第連絡するわ。……いい？ コスプレのことは内緒よ！」

やけに念を押して、自分の席に戻つていったな。そんなに隠すとか？

「……急に名前で呼べとか、コスプレしていること隠せとか、まったく女の子の気持ちはわからんなあ……つて！？」

突如視界を塞がれた。この硬くてこつこつした感触は……。

「おう、公太。金曜日はじうだつた?」（だきつ）

「（だきつ）じゃねーよ！ 朝つぱらから鬱陶しいんだよー。ド

ラー！」

黒光りする筋肉質な腕を振り払う。「えーい、離せ！ 男に抱かれ
る趣味はねえ！」

「つれねえなあ、三日ぶりの再会だといつのに」

「やかましい！」

俺の視界を塞いだ張本人、馴れ馴れしくてムキムキな二つの名
前は浅間龍一あさまりゅういちという。

学校一体格が良く、スポーツテストでも常に上位成績。反面、学
力は最下位。

趣味は筋トレとギャンブル全般。麻雀が好きで、名前にも龍とあ
ることから、俺たちはドラと呼んでいる。

いかつい外見や、過去にやんちゃしてたという噂のせいでの、皆か
らは敬遠されている。根はいい奴なんだけどね。

「どうだつたんだよ？ 成功したんだろう？ あの雰囲気で失敗なん
てありえないからな！」

「……うつ！」（グサツ）

そうだった。まだ皆には話してなかつた……！

「ま、まさかお前、成功を通り越してすでに性交までしたんじゃ…
…。週末を利用して彼女としつぱりな関係になつたとかねえだろ？
な……！？ ま、まだ早いぞ！」

「は、はは」

笑うしかねえ……。イテヒよ、心がよお……。

「羨ましいねえ！ こいつう……！」（ぐづぐづ）

「止めろドラ！ いてえ！」

痛い痛い、ほっぺたに指を突き立てるな！ そしてこれ以上俺の
心の傷を広げるなー！

「くそう！ こいつどれだけ力があるんだ！ ビクよウとしてもビ
クともしないとはー！ 誰か助けてー！」

「 ドラ、公太が痛がってるよ」

「 その声は 優！」

助けがきた！ 僕はその救世主へと視線を送る！

長髪をポニー・テールのように後ろで纏め、長身でモデルのようなスタイルの眼鏡が似合つ、このイケメン。名前は和久井優わくいゆうという。優という名前の通り、成績優秀、運動神経抜群の超優等生なのだ！ちなみに俺と優は幼稚園からの付き合いで一番の親友なのだ！ほらほら、親友が困っていますよ！ さあ、助けておくれ！

「 公太、面白い顔だねえ。ドラ もつとやれ」

ちょっと性格が歪んでいるのも彼の魅力だ！！

「 あいよー」（ぐりぐり）
優の号令と共にさらに腕の力を強めるドラ。
「 うりきりものーーーーー 痛い痛い！」
「 なんて冗談だ。ドラ、もういいだらう？」「
「 そうだな。ほら、解放だ、公太」
助かった……。ドラめ、憶えてるよ……！

「 それよりも公太。どうだった？」
「 ギクッ」

「 どうだった？ って。もちろん告白のことだよね……。

「 うう、どう言つたらいいんだろう……。

「」

「」

「……その様子だと”また”振られたのか」「
ばれた！？」

「はあ!!? あの雰囲気の中、振ひ切ったのか!!?」

「今、あの雰囲気とは金曜日の放課後の」とある。

つたが）ムードだつたのだ。

「ああ、振られちまつたよ」

マジか

「そつか。それは残念だ」

でくれたんだ。

お前がやがて俺のことを心配して、それで……

「二人共、心配してくれてありがとな！！でも、そんなに落ち込まないでくれよ！もう過ぎたことなんだし」

「じゃあ優の負けだな。学食のBセット、よひこへーべーへーべー

えつ?

「まさか麻雀と喧嘩以外でドラに負けるとはね」「ハハハハ、俺はギャンブル全般に強いからな！」

あれれ？ 君ら、ひょっとしてボクで賭けをしていました！？

「まさかまた公太が振られるなんて計算外だ。今回は僕も手助けし

たし九割は決まると思つていたけど。確立はあくまでも確立つてことだね」

「ギャンブルは計算じやないからな。流れつてもんがあんだよ」

「ドラはいつも流れに恵まれすぎなんだよ」

……ぐすん……。じりじりとうとう涙が止まりませんことよ……。

賭けに負けた優は、おもむろに財布から千円札を取り出して、ドラに手渡した。

「お釣りはいらないから」

「サンキュー、優」

無駄にイケメンだな！　おいーー！

俺は今、友情とはどうあるべきかを考え直すべきなのかも知れません。

「ドラ、お釣りで公太にも何か買つてあげてよ」

「そうだな、どうせなら全額、公太のために使つかー！」

やつぱり大親友だよ！　一人共ーー！

「ふー、今日も終わつたか」

授業が終わつて帰りのHRが始まるまでの時間つて、一番リラックスできるよね。この解放感がたまらんね。

「そういえば今朝以降、朱夏から何も接触がなかつたな。……あ、

ウルモフ」

そう考えたとき、教室に担任が入つてきた。

「席につけー」

担任の蒙古先生。007のウルモフ将軍に似ていることから、

皆からはウルモフと呼ばれている。

日直の号令の後、ウルモフの楽しい楽しい説教半分のHRが始ま

つた。

必要事項とちょっとした小言の後、頭を搔きながら面倒くさそうに現在一番重要である案件を口にした。

「……あー、二週間後には学園祭があるだが、うちのクラスだけ出し物が決まってない。お前ら一体どうするつもりだ？」

三週間後、我が校の学園祭が一日にわたって開催される。でも我がクラスは、どうにも個々の自己主張が強すぎるといふか、纏まりが欠けているところか……。

「ZZZ……」

……優は寝てるし。

「腹減った……。もう我慢できん！！！」

……ドラはいつそりとパンをかじり。

「盗まれてる————！？」

……朱夏はケータイゲームに夢中。

我がクラスはこんな奴らばかりなわけでして。未だに出し物が決まってないのだ。

「このままでは何も出来なくなってしまうぞー。誰か良い案はないのかー？」

ウルモフが怒鳴り、静まり返る教室。無理も無い。

何故ならこの質問は、今まで幾度と無く繰り返されてきたものだからだ。

実はこれまでに幾つも案は出されてきた。しかし、その度に男女間で論争が繰り広げられ、対立。結局纏まらず廃案になってきたのだ。

次第に誰一人として案を出さなくなり、現状に至る。

「……はあ。お前ら、残りは二週間しかないんだぞ？ 本当にどう

するつもりだよ」

ウルモフもいい加減にしどといた表情で嘆息している。そりは
言つてもなあ……。

そんな中、クラス委員長である朱夏が、唐突に立ち上がり提案し
た！

「占いをやりますーー！」

「…………占い？」

女子（テニス部）「あ、それいいかも！」

女子（ラクロス部）「私、賛成！…………和久井君との相性…………占
つてもらおう……フフ」

女子（相撲部）「それちょべりぐー」（死語）

女子の間から賛成の声が上がる。なるほど、女の子は占いが好き
だもんね。

しかし、男子の間からは反対が噴出。

男子（サッカー部）「占いなんてつまらないだろ！」

男子（野球部）「ソノヤーツス！」（やんなのやる氣でねーツス）

男子「デュフフ、それ、リア充しか喜ばない内容ではないですか」

K.「ねえ、公太氏り」

「リア充ってなんだ……？」

優「ＺＺＺ……」

ドリ「はぐはぐはぐ　　いつ……喉が…………！」

と揃つて野次を飛ばした。「の流れはいつも論争パターン

…………！

「おいおい、大丈夫かよ…………」

心配して朱夏を見ると

わ、笑つている…? 」の状況を…? なんだあの冷徹かつ余裕な笑みは…?

次第に大きくなる男子の声。そんな中、朱夏は凛として言い放つた!

「 巫女服」

「 「 「 …! ? …! ? 」 」 」

「の言葉に反応しない男子はいなかつた。騒々しかつた教室が、一瞬にして張り詰めた空氣に変わる。

「みんな、よくお聞きなさい…! …」

「ぐふっ…」

朱夏はウルモフを押し飛ばして壇上に上がり、力強く演説を始めた!

……大丈夫か？ ウルモフ……。

「占いで最も大切なこと。それは雰囲気よ。タロットにしろ、手相にしろ、密に神秘的な雰囲気を感じさせることが一番なの。そのため非常に重要なのが衣装。そして日本人がこよなく愛する神秘的な衣装。それは一体何？」

「巫女服です！」

と誰かが元気よく答える。……ドラだった！

「その通り！ だからこそ」

「クリという音が聞こえてくる。やはりドラだった。もはやドラの眼は龍のように猛々しい。……てか血走ってるだけか。

クラス全員の視線を一身に浴び、朱夏はどぎめの一言を言い放つた！

「 女子は全員、巫女服を着ます！」

「 「 「 賛成だ——————」 」 」

男子たちは大いに叫んだ！ 魂の叫びって奴だね！
この叫びの中には、もちろん俺の声も含まれている！ 一番大声を上げていたのはドラだったが。

女子（相撲部）「ちょっと男子ガチうるさいんですけどー～、チヨベリバ～」（そろそろウゼエ……）

女子（ラクロス部）「ちょっと巫女服着てみたかったしいかもね！ 男子にはドン引きだけど！ ……和久井君に見せつけよ……フ

フ」

女子（テニス部）「巫女服、楽しみだね！」

意外なことに女子たちから反対意見は出なかつた。みんな巫女服に興味があつたんだね。優以外。

……といふかこんな大歓声の中、寝続けられる優つてすげえ……。

我がクラス初、満場一致でクラスの出し物は占いに決まったのだつた。

第一話 主役はホッヂキス

「公太」

怒濤のHRが終わって間も無く、朱夏が声を掛けてきた。

「とうとう現れたわよ、主人公が。しかもこの教室に
「なんだって！？ もう主人公が！？ しかもこのクラスだと！？
やばい……緊張してきたぞ……。」

朱夏には主人公時間を迎えた人間がわかるらしい。一体誰なんだ
……！？」

今は放課後。教室に残っているのはごく僅かだ。

「この中に主人公が……。だ、誰なんだ？」

緊張が走る。喉が渴く。何せ俺はこれから当分の間そいつのサポートに徹する脇役にならねばならないわけだ。見知った顔なら幾許かはやりやすい。

朱夏が人差し指を立て、ゆっくりと矛先をターゲットに向ける。

「主人公は…………あいつよー！」

朱夏が指を差した生徒。あの姿は……。

「…………マジですか…………！？」

俺の目に映つた生徒。それは我がクラスで最も影の薄いと称された男。

「マジよ。今回の主人公。それは ホツチキスよーーー！」

「…………ホツチキスだと…………ーーー！」

ホツチキス。本名は確か倉敷啓くらしきけい……だったはず……。

クラスで最も目立たないのに、皆勤賞。

そして”何故か常にハサミやホツチキスを持ち歩いている”とい
う”目立たない奴あるある”を総取りしたかのような男なのだ。
それゆえに付いた仇名が”ホツチキス”。

「大丈夫なのかよ！？ ホツチキスだぜ！？ あいつが誰かと会話
しているところすら見たこと無いんだぞ！？」

「でもやるしかないのよ？ でないと一生」

「やりますーーー！」

……その先を言われるのがとにかく怖いぞ……。

「そしてヒロインは ああ。あの子ね。………… プブッ！！
「ヒロインだつて！？ ホツチキスの相手のことかー。朱夏さんや、
何で笑っているのですかな！？」

「ハハハハッ、ヒー、お腹痛いわ…………！ ごめんなさい、だつて今
回のヒロインって、先週公太が振られた相手なのよ。これはまた災
難ねーーー！ ハーツハハハ

「…………お前、同情する気すらないだろつ…………」

朱夏は顔を真っ赤にして笑っていたが、俺の顔面は蒼白になつて
いた。血の気が引いていくのがわかる。

「そんなのつて、ありか？ まだ心の傷、癒えてないんだぞーーー！」

「仕方ないでしょーう？ もう決まつたんだから」

先週、俺が振られた相手。それはクラスでも朱夏と人気を一分す
るほどのアイドル的存在。

「そんな……まさか　巡崎さんだなんて……！」

めぐりさきみと
巡崎美都。それが彼女の名前だ。あだ名はみつちー。

美術部所属で、在学中に多くの賞を受賞している我が校きつての天才だ！

それでいて自分の才能を鼻にかけることもなく、おつとりとした性格で誰にでも優しく、男女問わず大人気のアイドルなのだ！

それに付け加え、あの高校生離れしたスタイル。胸もデカイ事も然ることながら、特筆すべきはあの尻！！ 素晴らしきかな安産体型で、モロ俺の好みだつたのだ！！

そう、俺は尻フェチなのだ！！

「信じられん！　だつてあの巡崎さんだぞ！？　ホツチキスとなんて考えられん！！」

「でもホツチキスなのよ。これはもう変えようのない事実。……そうだわ、公太にもこれを見せてあげる」

そう言つて朱夏はバッグの中からヘンテコな形のメガネを取り出した。

「”見縁メガネ”～～！！」

「……なんだそれ？」

ドรามンがポケットからアイテムを出す時のSEが脳内に響き渡つた。

「このメガネはね……。なんと！　人の主人公時間を見ることが出

来るのです！！」

「見縁に見えるのか！？」

「ふふふ、洒落が聞いていて面白いでしょ？」

いや、そんなに面白くないけど……。

「そんな便利な道具があるのか！？」

「そうよ。公太、これでホツチキスを見てみなさい。面白いものが

見えるから」

俺はおずおずとメガネを取り、そつと掛けた。

「見えてきたでしょ？ ……”縁の糸”がね……」

ホツチキスを見る。特に何も変わった様子はない。……だが。

「…………おお！？」

見えた！ 微かにだけど間違いなく！ ホツチキスの左手薬指から、赤い糸が伸びていた！

「なんだあの糸！ あれが縁の糸つていうやつか！？」

「そ。主人公とヒロインを繋ぐ糸よ。運命の赤い糸つていうのは、これが由来なのよ？ 主人公の糸が、ヒロインの指に結ばれたら晴れてカップルになれる」

「ふむふむ。でも、その糸と主人公時間つてどう関係あるの？」
「糸の長さ＝主人公時間の長さなの。糸が長いと、それだけヒロインの指に近づきやすく、結ばれやすい。そういうイメージしてもらって構わないわ」

「へえー、へえーっと、俺はエアへえーボタンをバンバン叩く。

「しっかりと見てみて。ホツチキスの糸がどこに繋がっているかを……予想は出来ているけどね。でもこの田で見ないと信じられない。

「……ああっ！」

予想通りの結果が突きつけられる。ホツチキスの糸は、巡崎に繋がっていた。

「分かつたでしょ？ ホツチキスの糸は、みつちーの指に結ばれている。だからホツチキスが主人公で、みつちーがヒロインってこと」

……分かつていたとはいえショックだ……。

だつてそうでしょ！？ ボク、コクつたの三日前なのよ！？

「そうだ公太。自分も指を見てみなさい。一目瞭然よ」

え……、ボクの指……？

恐る恐る自分の指を見ると……。

「ない！ 赤い糸どころか、その糸屑一つない……」

「そういうこと。それじゃヒロインと結ばれるどころか、結ぶのに必要な長さすらないでしょ」

「そういうことなのね……」

改めて自分の境遇を突きつけられた感じだったね。だつて、一ミリもないんだよ？ 縁の糸。

「ちなみに私はメガネなしで見ることが出来るわ。それが私の能力なの」

「能力！？ なんかかかけえ！？ 能力者バトルが出来るつてか！？」

「……出来ないわよ。はい、メガネ返して。分かつたでしょ？」
確かに見えた。まだ細く、薄つすらとだが、でも間違いなく縁の糸は繋がっていた。だが！

「それでも納得できるか！　それに俺はまだ彼女のことを
「諦めてないの？　どんなことをしたって、絶対100%無理なの
に？」

「し、しじー！　そこまで言わなくても……　鬼！　悪魔！」

「巫女です」

「そうでした」

……俺、案外余裕なのか？

「公太が諦めているのがいまいが関係ないの。もう縁の糸は繋がつ
たのだから」「分かっている……。分かってはいるよう……！　だけどよう……。

「やひなこと一生ビ」

「やひなせていただきます……」

背に腹は変えられん！　今しがたの辛抱であるぞ！　頑張れ、俺！
「でも、俺はまだ手順なんて聞いてないぞ？　どうすんだ？」

「とにかく今は声を掛けるだけでいいわよ。少し会話したら戻つて
らっしゃい」

それが一番難しいんだよな……。ホッチキスと会話したことなん
て。

『ホッチキス貸して…』『はい』『ありがとづ』

……くらいしかないしな……。

とにかく俺の人生が掛かっているんだ。声を掛けるだけ掛けてみ
よづ。後は何とでもなれだ！

「あ、公太。一つだけ注意事項を言つておくわ」

勇む俺を朱夏が止める。俺が朱夏に視線を返すと、朱夏は真剣な眼差しを向けてきた。

「絶対にみつちーと付き合わないで」

！？

「それははどういう意味だ!? もともと脇役はヒロインと付き合えないのじゃ?」

「そう。付き合えない。でもね。付き合つて至るまでは常人と同じなのよ」

付き合つて至るまで……?

朱夏は話を続ける。

「主人公時間のない人間でも、付き合つて前までは普通に誰とでも接することができる。でも、いざ付き合つとなると話は変わつてくるの。告白やキス、それに準ずる行為は全てNG」

「つまりどういうことだ?」

「それは主人公のヒロインを奪つてしまつことになるから」

「……ヒロインを……奪つ……?」

「そう。今回の場合、公太がみつちーに告白したり、されたり、キスしたりすると全でが終わりつてことね」

「……ありえるのか? そんなこと」

「ありえるわ。先に言つた通り、付き合つまでは普通に接することが出来るの。絶対に忘れないで。主人公のヒロインを奪つてはいけない。たまにあるのよ。我慢できなくなつて脇役がヒロインを

」

「絶対にしない! するわけないだろ! ! !

俺は一度巡崎に振られているんだぞ? ありえないって。

「そう。なら安心ね。でも公太、気をつけなさい」

朱夏はさりに険しい表情になり、言葉を続けた。

「主人公やヒロインは脇役次第で大きく心境や行動が変わる。公太のちょっととした間違った行動が、後で大きく響くこともある。公太が良かれと思って行動しても、それがマイナスに働くときもあるの。こればかりは予測できない。だからとにかく気をつけなさい」

「……判つた……」

俺が良かれと思つてもマイナスに働くこともある、か。気をつけなきやな……。

「だからといって萎縮しちゃダメよ！ 最初はとにかく目立つこと！ それだけを頭に入れておきなさいー！」

氣をつけながらも、とにかく目立つ。ここいつあ、ハードだぜ！

「では公太！ 早速行動開始よ！ 行つてきなさいーー！」

「ああーー！」

ついに始まる俺の脇役人生！ 一生童貞は嫌だ！ 絶対に主人公に帰り咲いてやるぜ！

名脇役への第一歩。それはすばり、主人公と仲良くなること！
今までまともに話したことはないけれど、なんとかなるだらう。
いや、なんとかしよう！
いくぜーー！ 俺ーー！

「なあ、ホツチキス！」

「…………な、何かな、里美君…………。何か用…………！？」

そりゃ驚きすぎだつて、ホツチキス。俺から声をかけられるのが
そんなに珍しいか？

珍しいよな。俺だつて久々に話しかけたんだから。

「いや、用があるつてわけじゃないんだ。ただ…………」

「ただ…………？」

「…………？」

「…………？」

「うつ。予想以上に会話が持たない…………。

そうだ！ こういうときは共通の話題を振れば無難だ！
まずは これで攻めてみるか！

「数学の授業、眠かつたよな！」

「…………僕はそうでもなかつたんだけどな」

何ですとー？ あの数学が眠くないとなー？

「で、でもさ。微分とか積分とか、聞いてるだけで眠くなるだろ？
「そんなことはないよ…………。僕、理数系の大学を目指してるから微積
分は勉強しているし……得意なほうだよ？」

「マジか！ ジやあ今日の宿題の答え、見せてくれよー！」

「あ、うん…………。別にいいけど…………」

よつしゅー！ これで今回は優に借りを作らずに済むぜ！

…………つて目的が違うー。そりじやないだろ、俺！ 何か話題を
そうだ！

「体育のサッカーはどうだった？ 楽しかったよな！ 何せ俺はハットトリックを！」

「僕、運動は得意じゃないから……あまり楽しくなかつたよ……。里美君は運動できるから羨ましいよ……」

「サッカーが楽しくなかつただつて！？ 俺なんて体育がなかつたら学校に来ないくらい楽しみなのに！」

「俺と好みが正反対だなんて……！ ダメだ、仲良くなれる気がしない……。」

「くそ……ひとまず話題を変えるぞ……！ 次は これだ！！」

「ウルモフ、どうなつたかな？」

朱夏がHRにて押し飛ばしたウルモフは、勢いのままに頭から転倒、保健室へ運ばれていた。

「そう言えば、どうなつたんだろう……心配だね……」

「ああ……心配だな」

「そうだね……」

「……は、話が続かねえ……。」

その時、唐突に教室の扉が開いた！

「痛たたた……、まつたく委員長の奴、無茶苦茶しやがる……！」

氣まずい空氣の中、頭に氷を当てたウルモフが教室に戻ってきた。

「ウルモフの兄貴！ 無事だつたのか！ てつきりフイリップンで戦死したのかと……」

「誰がウルモフだ！ 勝手に殺すな！ しかもそれ、”はだしの

ン”ネタだろ?』

「よく知ってるな……、ウルモフ……」

「お前もな……。そいやお前ら帰宅部だろ? サッサと帰つて勉強でもしどけ」

それだけ言ひとウルモフは顔をしかめて教室から出て行つた。

「ウルモフ、無事だつたな……」

「…………」

またもや氣まずい空氣。

こんな空氣、耐えられねーよー。ダメだ、さらに仲良くなれる気がしない……。

待て待て、ここで諦める訳にはいかん!! とつておきの話題を

……!!

「昨日のプロ野球の試合、見たか? 我らがジャイアーズの圧勝でさ!」

押売魔神ジャイアーズムズ! 他球団の良選手を惡魔の誘いで(金の力)で引き抜き、圧倒的財力でリーグを勝ちぬく俺の好みの球団だ!

「いやー、良かつたよなあ……。何せ打順1~8番までの全員が去年まで他球団で4番だった選手だもんな! まさにオールスター! 俺が嬉々として話し出すと、それに反比例するかのようにホツチキスの表情は沈んで行つた。

「…………僕は相手のタイガルダズのファンなんだ……」

なんだと!? タイガルダズファンだと!? 天敵ではないですか!

関心タイガルダズ。ジャイアーズムズとは正反対で選手一人ひとりをじっくりと育てる地味な球団だ。俺の趣味に合わん!

「ジャイアーズムズは少し強引すぎるよ……。野球はタイガルダズみたいに選手を大切にしなきゃ……」

「そ、そうか？ 僕はあるの傲慢なプレイスタイルが大好きなんだけど……」

ジャイアーズムズとダイガルダズは因縁のライバル、犬猿の仲なのだ！

無論、そのファン同士の仲だつて悪い！ ダメだ……、もはや仲良くなれる気がしない……。

「…………里美君…………僕、帰るね…………」

「お、おう……。じゃあまた明日な……」

ホッキスは早々と教室から出て行つた。

無茶言つなよ。俺だつてこれでも頑張つたんだぜ？
……などと言える空氣ではないことは読めた。

不機嫌な朱夏だつたが、しばらくすると何かを閃いたような表情に変わる。……嫌な予感。

「公太。あなた今までずっと主人公をしていましたよ？ だから脇役に慣れてないのよ」

「う～む。 そうなのか？ 今まで主人公の自覚なんてなかつたけど」「自覚がないってほどに、主人公してたのよ。さすがは”元リア充”ね」

「リア充つて、なんだ？」

「…………」

「あ、おい？ 朱夏、どうしたんだ？」

「一体どうしたんだ！？ 朱夏がなにやらブツブツ言いながら震えている！？」

「…………ん？ どうして拳を握り締めているんだ？ ……って、グオエエエッ！！」

今度はみぞおちに入った……。い、息ができる……！

「…………だ、だから……な、んで殴るんだ……？」

「ふん！」

倒れこむ俺を見下しながら、腕を組む朱夏が言い放つ。

「リア充という言葉を知らない時点で、リア充なのよ……！ ……なんで私がこんな説明しないといけないの…………」

「な、なんでそんなに怒っているんだよ……？」

「うるさい！ リア充つてのは昔の公太見たいな奴のことと書つての

よー！モテモテでウハウハで毎日がリアルに充実していただけ
う?」

朱
百

朱夏は俺にびしつと突きつけて、言い散らす。

「でも良かつたわね！ あんたはもう立派な”元”リア充よ！・」

「元々言うな！ 今だつて十分そのリア充つてやつだ！」

「主人公時間が無ハんだも。これからは一生リア充こなれなハ」

もよ？
とすると一生童貞

「うわね……」

「公太、二つからぬ

「あー、あー、體！」えません！」

「ゲエエッ！！」

またもや腹パン。ちよーと殴りすぎじゃないですか！？

「其一」

暴力反対!と言える空気でないことも分かる。

二十一
日本文藝傳記

「おはよう」

ニセに来なさい!!

卷之三

「言ひつけ」とで、俺は半ば無理やり朱夏の家に行くことになつ

た
の
た

第三話 巫女さんは「スプレ好

「おーおー、这儿行くんだよー?」

「どうして、私の家に決まってるじゃない。もうボケた?」

朱夏の自宅に誘われ、ついていくと小一時間。

俺たちは何故か山道を歩いていた。

「ボケてませんよー? どうしてこんな獣道を歩いてるのかと聞いてるんだー!」

「いいから黙つてついてきなさい」

生い茂る草木を掻き分けながら豪快に進む朱夏。とにかく見失わないうまじないと……。

道無き道を進む」とおもそ三分。

「着いたわよ!」

「やつと着いたか……疲れた……」

必死に山道を抜け、辿り着いた場所。そこには

巨大な鳥居と千年杉に囲まれた神社があつた。

「神社なのか!?」

「ええ。言つたでしょ? 私の家は代々縁結びの神様を奉つていてるつて。ここ”縁神社”が私の家」

「ほえー」

大きな鳥居に厳かな社。辺りは静かで、聞こえてくるのは虫の声。こんなに落ち着く場所がこんな山の中に……あれ? この景色……。

「俺、ここに来たことあるだーー？」

「さうなの？ 何しに？」

「何しに、って決まってるだろーー？ 縁結びの祈願をしにだよーー！」

それよりも、一体どういうことだ？」

「どうこう」とって？」

「ここには階段があるじゃないか！ 何故階段側から上がらなかつたんだよーー？ そもそも何故山道を通つた！？」

俺は激しく追及したつもりだったのだが。

「山道の方が近道なの」

「……時間にしてどのくらいーー？」

「およそ5分」

しつとほざく朱夏に怒るのも馬鹿らしくな。

「……それくらい我慢して階段から上がらせば……」

俺の咳きを無視して、朱夏はそそくさと社務所の中に入つていく。後を追つて恐る恐る玄関に入る俺。

「お、お邪魔しまーす……」

他人の家の匂い。それだけでも緊張するのに、女の子の家だもんなあ……。心拍数上がるよ。

昔、彼女がいたときは、色々と事情があつて家へ遊びに行けなかつたからね。

『公太、こつちこつち』

「お、おづ」

先に家に上がつた朱夏が、玄関で佇む俺を呼ぶ。

「ビードー!?」

『一番奥の部屋だから。』

廊下の奥から声が聞こえた。
なるほど、あの部屋ね……。

「…………緊張するぜ…………」

女子の部屋か……。雑誌や女子の会話とか聞く限り、さぞ可
愛らしい部屋なんだろ?!

あれだろ? ぬいぐるみ! でっかいクマとかあってやー。枕元
にたくさん置いてあつたり!

寝るときはお気に入りのぬいぐるみを抱いて寝るとか! そんな
可愛らしい部屋なんだろ!?

そんな場所に踏み込む……。ワクワクが止まらねえ!!

「……フ、フオオオオオ……」(妄想中)

「あのー。人の部屋の前で変な声あげないでくれる?」
あ。声に出ていたのか。

「よし。行くぞ! ちやんとノックして

「朱夏、入るぞ?」

「着替え中」

「…………」

先に言えーなら誘うなー…………といひは心の中で抑えよう
!

今の世の中、女子の着替えより優先されることなど存在しないの
だ!

待つことおよそ分。待ちわびた時間がやつてきた。

「入つていいわよー」

ようやく着替え終わつたか。さて、早速入れてもうひとつしましょ
う。

俺はドアノブに手を掛け、ゆっくりと回す。緊張の瞬間だね。

「この扉の向こう側には、きっとファンシー溢れる世界が広がり、心地よい香りと共に俺を歓迎してくれるに違いない！」（童貞の妄想）

さあー、この感動をこの田に焼き付けるぞーー！

「お邪魔しま すつ！？！？！」

俺は戦慄した。

扉を開けると共に鼻を突いた、なんとも籠った匂い。

部屋の光景を田の当たりにし、妄想のファンシー世界は、現実の前にあたかも崩れ去った。

「……マジかよ……」

「ん？ まあ、適当に座つてよ」

「適当に座れだとー？ ディーニさんなスペースがあるんだーー！」

床には食べ終わったお菓子の袋とか、ペットボトルとか、コンビニの弁当ももそこかしこに散らばっていて！

ティッシュペーパーを丸めた「」、DVDケースや服、拳句の果てには汚れた靴下まで散乱してるし！ 一人暮らしのおっさんか！？

んつ？ これはコスプレ用の衣装か……。巫女以外にもたくさんある…… つてありすぎだろ！？

壁には作りかけであろう衣装やウイッグが大量に掛けたり、しかも数が多くて窓が塞がっている…… 光が入らねえ！？

「…………」（放心中）

「公太、どうしたの？」

「なんだこの部屋は…………つーつー？」

俺は無意識に叫んでいた！！

「レディに向かつて、何だとは失礼ね！」

「それはこいつちのセリフだ！！　男の夢や妄想をぶち壊しやがって！！！」

「知らないわよ、そんなこと。私の部屋なんだから、公太には関係ないでしょ？　そんなことより作戦会議よ！！　さて、始めるわよ！」

「こんな周りが気になりすぎる部屋で作戦なんて立てられるか！！！
あれはなんだ！？」

壁に掛けた大量の衣装を指差す。

「何なんだ！？　この大量の衣装は！？」

「言つたでしょ？　コスプレが趣味だつて！」

「巫女服は！？　神社の家の娘だから、とかもつと深い理由はないのか！？」

「…………」

急に静かになつた朱夏。鋭い視線が俺を刺す。あれ？　もしかして地雷踏んだ？

「……確かに神社の家の娘として、巫女になることもあるわ。それに他の衣装だって仕事で着ることもある」

「……仕事？」

「…………」

呆れ顔の朱夏。はて、仕事……？

「もう忘れたの？ 最初に言つたはず。私は縁結びの神様に仕える巫女として、仕事をしてゐる」

あー、そういうえばそんなこと言つてたね。あの時はショックな出来事が色々とありすぎて記憶が曖昧なんだよね。

「私の仕事。それは、誰かの脇役になつて、恋愛成就のサポートをすること。私は今までずっと誰かの脇役を演じてきたの。生まれてからずっと、ね」

「生まれてからずっと……？」

「そうよ」

……朱夏はしれつと言ひのけたけど、それってかなり辛いことなんじやないか？ 脇役がどんなものか、俺にはまだ分かんないけどや。

「主人公には様々な人がいるわ。学生だけじゃない。社会人やお年寄り、逆に幼稚園児だつている。その人達に合わせるために、様々な衣装が必要となつてくるの。あらゆる状況に適切な衣装が必要だつたのよ」

……なるほど、朱夏にはコスプレをする理由があつたのか……。感心してしまうな。

「そつか……。お前も苦労してんだな。この衣装も全部そういう理由だったのか……」

自分の使命を全うするために、これら全部用意したというわけか

……。

なんて责任感のある奴なんだ！！

「でもね」

「でも？」

「『ロード』にあるのは全部、ただの趣味よ……」

「…………」

「感心して損しました!!」

「ちなみに」

「ちなみにー?」

「私、”性格コスプレ”もしているの」

「”性格コスプレ”ー?」

さつきからオウム返しの連続だ。仕方ないよね。だつて驚きの連續なんだから。

「その名の通り、主人公の状況によって性格を変えるの。普段もしてるのよ?」

「……もしかして今は委員長な性格……?」

「よく分かったわね! その通りよーーー!」

……これが本当に委員長の性格なのか? 委員長って担任を突き飛ばしたりしないものだと思つけど……。

「主人公は千差万別。主人公にある程度好まれる性格を研究して、演じているのよ。もちろん、かなり細かく設定するのよ?」

「演じる、か……」

朱夏は笑いながら言つた。「それってかなりストレスが溜まることだよね。」

「学校でも性格を演じているんだろう? だとしたら、『ここまでは僕』で素の自分を出しているんだろう? ……?」

そう考へると、朱夏って想像以上に大変な仕事をしているのか。……なら俺も主人公に戻る少しの間くらい、お手伝いしてみますか! 少しでも朱夏の負担が減ればいいんだけどね。

「では! 実際に演じて見せましょう!」

……あれ? 意外に楽しんでる?

「それでね、それでね わたちがいいんちよんげんちかってね
ふたりゅをくつつけりゅの」

「…………」

あの後すぐ、朱夏は着替えのために俺を部屋から追いで出し、しばらくするとまた部屋に招き入れた。

朱夏曰く『これから脇役を演じるのなら、私の演じる姿を参考にするといこ』とのこと。

その結果がこれだ。部屋に戻るとすでにこの状態だったのだ。

「ふたりよおんなじしゃせよつをしゃしえてね ふたりのじかん
をふやちゅの」

「…………」

「ねー、ねー、ひつたあ、きこてるの?」

我慢の限界だ！！ なんだ！？ この生物は！？

「どうで使うんだよ！ そんな脇役！？」

対口レーン主人公の勝役

四ノ十

口リンクは犯罪だぞ！ そこで血ソムリを演じるにちと犯罪的だ――

卷之三

「朱夏、もう分かったから止めてくれ！ 脳が壊れる……」「この程度でだらしないわね。だからホッチキスにも逃げられるの」

その恋人から逃げられたみたい言い回し止めでもらえます！？

ホリチャギアとどんな関係は見えただよ！」

とにかく公太さっきから何度も言つてはいるけどさ、私が委員長権限を使って二人を近づけて、学園祭の作業を同じにするから。公

……ああ、さつき言っていたのはやうやくことだったのか。全く
聞き取れなかつたよ。

「それで公太。あなたにも宿題を出す」

「宿題？」

「……えーと、」の辺りにあつたはず……」

まるで映画のドライブもんがポケットから道具を探すときのよつて、元机から道具をポイポイ投げる朱夏。

「…………ないなあ。あ、これ！！ なんだ、ヤカンか」「整理しろよ…………。てか何でヤカンとか出てくるんだ！？」

現しそぎでしょー!?

「あつたあつた！ これこれ！」

朱夏が嬉々として取り出したもの。それは
「こ、これは……いわゆるギャルゲーというやつか……？」
「そ、ギャルゲー。ギャルゲーには色んな脇役が出てくるからね。
それを参考にしなさい。そこにある4本全部

.....同じような顔に、凄まじい髪の色だ.....。てかこの髪形、一
体どうなってんだー!?

初めて見るギャルゲーのパッケージに思わず目を見張る。
というかこれって男用のゲームなんじやないの？

「女の子がギャルゲーなんてするなよ！」

俺は思わず叫んでしまった。この事がのちに後悔する」と元なる

「なんだって？」（ブチン！）朱夏が小さく呟いた声

何故なら
朱夏の核地雷を思いつきり踏んでしまったからだ！

朱夏はギャルジーのパッケージを、まるで印籠のよつて掲げて、高らかと叫んだ！

「女の子がギヤルゲーやつて、何が悪い！？」

キツと睨まれる。……怖すぎるぞ！？ 身の危険さえ感じる！－
俺はその圧倒的な迫力に全身が震え、言葉を失い呆然とせざるを

得なかつた！

「……わ、悪かつたつて！－ 朱夏、そんなに怒るなよ－ 本当に悪かった－！ 許してくれ－！」

「ふん！！ 分かればいいのよー！」

そこには怒り心頭でふんぞり返る朱夏と

とつさに土下座をしている俺がいた。

土下座は俺が身に着けた最強の護身術だ！

プライドはないのかつて？

「なあ、そろそろ許してくれよ……。女の子だつてギャルゲーくら

いしたいよな！ そうとも！ 俺が間違つていた！」

「うるさい、
”元”リア充……」

「元々を強調するな！」

こんなやり取りを続けるうち、朱夏の頭に上った血もだいぶ引い

てきたみたい。

……今度は逆に冷たい言葉で突き刺してくる。

「……そうね。もう許してあげる。だって公太はこれから一生、リ

「一生童貞で死にならせて」
「やめやめ――――――！」

「Jの女、絶対ドSだ！！

……いや、もしかして性格をコスプレしているのかも知れないから、実際はどうなのだろうか？
でも現実に目の前にいる朱夏はただのドSだ！！……鞭とか蠅燭とか出してこないよね……？

「でも大丈夫よ、公太！ 三次元がダメでも二次元があるわ！ ほ

ら、彼女たちは裏切らないわよ！――！」

「嫌ー―― 聞きたくない――――！」

「ほり、Jの四本全部貸してあげるから―」

「絶対に要らん！――」

「後悔するわよ？」

「うう……。確かに興味がないことはないんだけど。でもダメなんだ！」

俺は知っている！ そいつに手を出して廃人になってしまった隣の家のお兄さんを――！

「い、今はそんなことしている場合じゃないだろ！？」

「それがしている場合なの。さつき言つたでしょ？ 公太は脇役に慣れてないって。だからゲームから何かしら学ぶことが必要なの！」

「うう……、でも体から拒否反応が……」

「嫌だ！ 俺は絶対に隣のお兄さんみたいにはなりたくない――！」

「そんなに嫌ならもういいわ」

嫌がる俺の姿を見て、朱夏も興が削がれたみたいだ。薦めるのを諦めた。

助かつた……俺は廃人になるつもりなんてない……
俺はホツと胸を撫で下ろす。

「じゃあ一生”ぼっち”ね。まあせいぜい長生きしてね」

やつぱりこう言われるのね！ それは嫌だ！！ でも廃人になるのも絶対に嫌だ！！

「孤独死か……。最近は増えてるみたいだし、別にいいか」「ギャウフ……！」

くそ、ちくちくと心を攻めてきやがる……
……だがギャルゲーだけは絶対に……！

「童貞のままお陀仏ね～」

「あああああああああつ……！」

「まあ私にはどうでもいいことなんだけどさ」

「うわーっ！ やります！ やらせてくれださい！ 貸してください！
いやむしろ売つてください……！ 童貞で死ぬのだけは嫌だ
！！！」

「風俗にでも行けばいいんじゃない？」

「それだけは絶対にしないと決めているんですけど……！ お願いで
すから、朱夏様……！」

俺が泣きながら懇願すると、朱夏は積まれたギャルゲーに向かつてびしつと指刺した。

「そ。そこまで言われたら仕方ないわね。貸してあげるわ？ じゃ

あそこにある四本を明後日までに全部クリアしてきなーこ」

「この四本を全部だと！？」
やつたことないのに！！

「無理だろ！？」

俺、ギャルグーなんて

「学校にも来なくていいから。当然外出も禁止。学校には私から連絡しておくれ」

「それもでさるのかよー？」

「当然でしょう？ それとも公太。あなた一生童貞でいいの？」

「やつてまじりますー！ 全ルートクリアしておきますー！」

「やあひといでもフルコンプよー」後、攻略サイトを見直してやるの

卷之三

「巫女です」

「そうでした」

このくだり、恒例になりつつあるのか？ あんまり面白くないんですけど。

「文句言わないの。時間も限られているのだし。明後日、ちゃんと脇役になりきれていいかどうかテストするからね」

卷之三

もし不合格なら……

……それはもう少し、明日、朱夏は一体何をするつもりなのだろうか。

「俺が休んでいる間、朱夏は何するの？」

「ちょっと準備があるの。委員長権限を最大限行使してね……。」フ

フフフフフ

なんとこゝ黒い笑み！ やつぱり朱夏にええええーー！

「とにかく、公太はそのゲームをクリアする」と一 わかった！？」
「…………」

やつぱりやるしかなさそうだな……。今日と明日でクリアできるのか？ これ。

「じゃあ携帯出して」

「え？」

予想外の朱夏のセリフ。

「アドレス交換。当たり前でしょ？」

「そ、そうだな……」

今後のことを考えると、朱夏と連絡しあつことは多いはずだ。アドレス交換するのは当たり前か……。
でもなあ……。

女の子とのアドレス交換って、本来なりもつとデキデキするイベントだとと思うんだよね。

そりや人気者の朱夏のアドレスがゲット出来たのだから本来は喜ぶところなんだけどなあ。

なんだかなあ……。期待出来ないと知っているから嬉しくも何ともないんだよね……。

ドラに見せたら狂喜乱舞しそうなもんだけど。

「はい。登録終わり！ ょし、やつわと出でけーー！」

その後すぐ、俺はゲームを持たされて家から追い出されたのだが

た。

脇役サブストーリー1 一次元くよつじやー

妹キャラ『はやく、起きて。お兄ちやん でないと キス、しきやうよ……？』

「…………」

幼馴染キャラ『いい加減起きなさいー。せつかくあなたの為に朝ごはん作ったのに……。冷めちゃうわよー。』

「…………」

妹キャラ『お兄ちやん、早く学校行こいつ？ そつだ、たまには手を繫いじうよー。』

妹キャラ『え？ 恥ずかしいって？ 何言つてんの？ 兄妹だよ？ これくらい普通だよー。』

幼馴染キャラ『ちょっと、私とも繫きなさいよー。……それとも何？ 妹とは良くて私はダメ、なの…………？』

「…………」

「うわああああああ、鳥肌が止まらない……。何だこの恥ずかしかれるセリフはっ！？』

朱夏に渡された四本のギャルゲー。俺は最初の一本を起動し、プ

レイ時間およそ10分という序盤のうちに悶え苦しんでいた。

「はあ、はあ、あ、ありえんぞ、こんな設定……もしかして

他の3本もこんなのはっかりなのか……？」

キラキラした田でこちらを見上げるパッケージの美少女たち。

俺にはこのキラキラは眩しそぎる……！

「こんなのはけたら、俺は悶え死ぬ……確實に……！」

ゲームはさらに続く。場面はどの女の子に会いに行くかの選択肢

1。

「えーと、どうを選べばいいんだ？……ううだ、妹にしよう…

…」

妹キャラ『お兄ちゃん！お弁当忘れてたよー。そうだ、お昼一緒に食べようよー!』

妹キャラ『お兄ちゃん！はい、あーん　どうへ　おこし〜?』

妹キャラ『お兄ちゃん！今度は私にも、あーんして?』

「はい、あーん…………ちょっと待て！俺は今一体何を口走つていた！？」

やばいやー！洗脳が始まつた！！

妹キャラ『えへへ、おこしー　お兄ちゃん、もう一回ー。』

「もー、しょうがないなー、もう一回だけだぞー。」

…

「1、「これは……ー　またかー！」

すでに洗脳が完了している……！？

「おおおおおおおおー！田を覚ませ、俺ー　現実に帰つてくるんだ！」

俺はとつたに思い出した！　そう、隣の家のお兄さんを…

そうだ！俺はいつか聞いたことがある！この叫びを！
あの時は何の叫びか分からなかつた！だが今なら分かる！この
れだ！

「……………」これが何かいふ。」

そうだ、あの夜、あの夜以降、お兄さんの姿は見なくなつた！
噂によると、あれ以降、ずっと部屋に引きこもつてゲームに没頭
しているらしい！

「俺は絶対に負けない！　俺は絶対に負けない！」
「俺は絶対に負けない！　俺も同じ状況になる可能性がある……！」
「俺は絶対に嫌だ！！　俺は現実に生きるんだ！！」
「俺は絶対に負けない！　俺は絶対に負けない！」

妹キヤラ『あ、お兄ちゃん。せつぱたに』飯粒ついてるよ?
えいつ！ペニ

「ぬお！？！？」

妹キャラ『くくく、』ねえね、お兄ちゃん……。ここ、やつらやつた』

「そうかそうか、なら仕方ないなあデヘヘ。」

ま……まさか……俺は……すでに……洗脳されて……！？

「うーん、何がいいの？」

俺が悶絶している最中聞こえてきた、現実の声。

「ひ、聖！？」

俺にはひとり妹がいる。名前は聖^{ひじり}。年齢は俺より一ひとつの中二だ。

「入るよ？」

「ちょ、おまつ！」

待て！ 今部屋に入るな！！ 見られては非常にまずいものが…！ お願いだから少し待つて！ セめてテレビの電源くらいい…！

そんな願いも虚しく無慈悲に部屋の扉は開いた。

「何してんの？ こうに。そろそろご飯だよ？」

「い、いや……ちょっとゲームをね」

間に合つた！ あきらめきりテレビを消すことが出来た！ だが。
「新しいゲーム？ 私もやりたい！ ちょっと見せて！」
「待て、これはお前に出来るような簡単なゲームじゃない！ ……あ！」

俺は言つてから後悔した。そつだ、こいつは…。

「へえ、それは面白そうだね……！ 私に出来ないようなゲームなんて興味あるよ！」

極度のゲーム好きだつたんだ…！ まるで獲物を見つけた肉食獣のように舌なめずりしながら迫ってきた…！

「とにかくゲーム画面見せてよ！ 私、アクションやRPG、シミューティングやパズル、格ゲーでさえ得意なんだよ？」

そういうえばこいつ、ゲーセンで廃人達をフルボッコにして泣かせた事もあつたな…。あの時は笑えたけど。いや、そうじゃなくて！

「とにかくダメだ！ さ、先に飯食つてみよ」

「えー、ゲームゲームう……」

近づく聖を必死に抑えるが、予想以上にその力は強かつた！

「ダメだー！」

テレビの電源ボタンは俺の体でガード！ 後はゲームの電源ボタン！ これを押せば……！

「ほつ、ポチつとな

ひつゆ。

「わくわく。どんなゲームかなあ！？」

ゲームはオート再生で進めていた。頼む……！ セメテ当たり障りのない共通ルートくらいでいてくれ……！

妹キャラ『お兄ちゃん、だーいすき』

という儂い願いすらも、粉々に打ち砕かれた。

[REDACTED]

妹キャラ『お兄ちゃん、一緒にお風呂はいり 背中流してあげる

ね
！
ル

しかもよりもよつて入浴シーンだつて――――！？

卷之三

妹キャラ『お、お兄ちゃん、そんなとこ、触りないでよお……。でもお兄ちゃんだからいいのかな……?』

「ちよ、おま! いくらゲームだからって 何やつてんだ!…? こんなもの聖に見せたら……。」

俺は恐る恐る聖へと視線を向けると。

「……………」「……………」

「……………なんでしょうか?」

聖はこいつらへ至つて普通の笑顔を向けてきた。ただ眉毛がピクピクしているのを除けば。

「最低」

「……………はい」

笑顔は突如反転し、腐った魚を見るような視線を突きつけてきた!

ドスドスと部屋から出て行く聖。最後にこいつを一瞥して。

「当分、声掛けないでね」

そう言い残して出て行った。

後にはオートで進むゲーム画面と俺だけが残された。

妹キャラ『また一緒に入ろううねー お兄ちゃん』

「やがて二〇一九年、

第四話 朱夏の激励

「ね、眠い……」

水曜日の朝6時。

重いまぶたを擦りながら、誰も居ない教室で一人呟く俺。

「なんだってこんな朝早くから……」

実は昨日の夜、シユカからメールが来たのだ。
その内容とは

朱夏『明日、6時までは教室に来なさい』

というものだつた。一体何をするつもりなんだ……。

「おはよう。ちゃんと來てるわね」

少し遅れて朱夏も登校してきた。なるほど。これが委員長モード
つてわけね。

「当たり前だろ?……」

朱夏から来たメール。実はあれには続きがある。

朱夏『 来なかつたら、一生童貞だから』

もはや脅迫メールじゃないか、これは……。

「それで、こんな朝っぱらから何をするつもつだ？」

「…………」

朱夏に問いかけるも、黙つたまま答えよつとはしない。それどころか呆れ顔でこちらを見ている。

「どうした？ 朱夏」

「…………」

一体何なんだ？ 朱夏の表情は依然として変わらない。

「おい、朱夏。いい加減に」

「せいや！－」

「グフツ！－」

朱夏は唐突に拳を振り上げたかと思つと、その拳を躊躇いなく俺の腹にぶち込んでいた！

…………最近こいつには殴られてばかりな気が……

「な、何故殴つたし！－？」

「…………」

「…………へ？」

「へ？ つじやないでしょ？ 早くリアクションなさい！」

「そ！」は脇役らしくリアクションしなさいよー！」

……つて、俺はそんなつまらない理由で殴られたのか？

「おれがへがれや三月の朝ひよせりから變なゝと聞へてさじやねー

「とにかく、貸したゲームの脇役っぽいことをしなさい！」 言った
でしょ？ テストするつて…」

ああ、なるほど……。これはすでにテストってわけね。それを先に言えよ。

朱夏から借りたゲーム。それの脇役っぽいことか……。
ああ、そういうば最初名前の読み方が分からぬキャラがいたよ
な。確かあいつは……。

はるはら、だつけ？

「おはよう、朱夏。これから一体何をするんだ？」
カバブランアアアアアアアツ！！」

こ、今度は正拳突きですか……！？

いくんだね……。

……つて、そうなら終わりだぞ、俺。

「ううん。まあ今洛ね」

「じゃあ何故殴つたし!?」

卷之三

- 1 -

た、確かに……。再現しすぎツス、朱夏さん……。

「どう? 全部面白かったでしょ?」

「ま、まあな……」

代わりに大切なものを失つたけどな。未だに聖は口を利いてくれないし……。

「しつかりゲームをやり込んだみたいね。では早速作戦を開始します」「うう

ついに俺が脇役として動くときが来たようです。出来れば殴られる役はもう嫌だなあ……。

「今回の作戦名。それは」

(「クツ……）

「……同じ作業で親密度アップ作戦! “略して” オナップ”

!—！」

「……」

「どう!?” オナップ作戦”。いい名前でしょ!」

「ソ、ソウデスネ」（棒）

い、言えない……。ネーミングセンスが無さすぎるだなんて……。
……とか色々と不味いだろ、その名前!——一步間違えたらセクハラですよ!?

「でしょでしょ!?” これ、昨日これ考えるのに5時間も掛かつたんだから!」

「ソレハタイヘントシタネ」（棒）

そんなキラキラした田で見るなよ……。心が痛くなつてへるだろ
う……？

「そしてこれがオナツプ作戦のために作ったアイテムよー。」

教室の後ろに置いてあったダンボールを、高々と皿皿とさわざわざる
朱夏。

「なんだそれ？」
「これはなんと……！」
「くじか？」
「…………？」
「…………？」
「…………？」

いや、そんな驚く顔をされてもね。そりや分かるよ。箱の上に六
開いているし、何より

「思いつきり”くじ”って書いてあるぞ……？」

「あつ」
「…………」

「やういじ……」それで学園祭の作業の班分けを行つたよー。

あー、はーはー。今回もこのやり取りを無かつたことにする
わけね。だいぶお前の性格が分かつてきたよ。ですがに演技じゃな
いでしょ？

「今日のHRでみんなに引いてもらひつ。このくじの中身は委員長
である私が作ることになつてね」

作ることに”なつて”、ではなく”した”のだろうな。

「なんとー、このくじ箱に細工を施したのー。」

朱夏が箱の中を指差す。中には無数の数字が書かれた紙がビニール袋に入っていた。

くじに書いてある数字は、おそらく班分けの数字。穴もひとつしかないし。

一見して、ビニもおかしなところはない。

「これが細工？ 普通に見えるが……」

「そう思わせなければ細工にならないでしょ」

「その通りですね」

「よく見て。このビニール袋。実は一枚重ねになつているよ」

「ほほう。それでそれで？」

「ターゲット以外の人があくじを引くときは、そのまま上の袋のくじを引かせる」

「ターゲットには下の袋。下の袋には7の数字しか入つてないの。私達とホツチキス、みつちーの時だけ下の袋を開ける」

「だから私達はどうやっても同じ班になれるってわけ」

「なるほどな。昨日の準備つてのはこれのことだったのか」

朱夏もやることがえげつねえぜ！ わうーうの嫌いじゃないわ！

「これで確実に同じ班になれるな……」

「……しかしこれ、どこかで見たトリックだな……。確かテレビideon

ラマで。

見ると、朱夏は何冊かの本を抱きしめていた。

「あ、あれは！ なぜ スー？」

必死に隠しているが丸見えだ！ 僕もあの本を見たことがあるぞ
！ ブック フで！

よく見れば朱夏の本、 ックオフの値段シールが付いてるじゃな
いか！ 好きなら新品で買えよ！

「次郎最高……！」

知らんわ！ つヒツツ コミを入れてやりたい。

……そんな」としたら確実に殴られるからしないけどね。

「とにかく、準備したのはこれだけなのか？」

妄想に浸りきっている朱夏をこちらに戻さないとね。

「そうね。後はターゲットの情報を集めたわ」

……思つただけどこいつ、一体どうやって情報を集めてるのだろうか……。

「今回の主人公、ホツチキスは、今までほとんど女の子と話したことがないくらい内気な性格。だから今回は非常に難しいミッションになるわ」

そうだろうね。俺だって一昨日の会話が歴代最長だよ。

「だけど、ホツチキスには一つ、趣味があるの。それは電子工作」

「電子工作？ なにそれ？」

「電子部品を使って工作をすることよ。発光ダイオードとかトランジスタとかを組み合わせてね」

「…………それっておもしろいのか？」

「ダイオード？ トランなんとか？ 英語はわからん。

「好きな人は好きなよ。でね、今回はそれを利用することにした

わ

「どうやって利用するんだよ？　まさか俺にも電子工作しろってん
じゃないだろうな？」

「まあそれもあるけどね。メインは電子工作を学園祭で使おうと思
つて」

「使えるのか？」

「電飾よ。占いの館の電飾。雰囲気を作り出すためには照明を工夫
しないといけないけど、それを電子制御してもらおうと思って」
「自動で出来るから当田の人員も節約できるし、悪くないでしょ？」

「へー、そんなことが出来るのか」

「それにそういう大道具係つて、当田あまり田立たないしホツチキ
スにはぴったりだと思う。私達の班は大道具に決定。だから、はい

」

「なんだ？…………つて、おも！」

朱夏はどこからともなく数冊の分厚い本を取り出し、ドンと俺の
机の上に置いた。

「『サルにも出来る電子工作』…………？」

……これはあの有名な『サルでき』シリーズの本ではないか！
色々な作品に出てくる伝説のシリーズだ！！

「それで、やっぱり俺もやるわけね…………」

「大道具係になるんだから当たり前でしょ！　これで少しは勉強し
なさい！」

「それに電子工作という共通の話題が出来たら、あなただけって話し
やすいでしょ？」

大道具なんて地味な仕事、初めてだよ…………。でもまあ確かに、今
の俺にはホツチキスとの共通の話題がない。

ならこれで少しは話題が出来るかも。

「わかったよ。」これで少しは勉強しておく

「よろしく。そうそう、その本、図書室で借りたんだけど、返却期限は学園祭の次の日だから。公太から返しておいてね」

「…………」

ま、まあ朱夏がわざわざ借りててくれたんだ。そのくらいはね。それに俺は主人公に戻るために何だってすると決めたんだ。この本の内容を理解することくらい容易いことだー。

と、意気込んでページをめくつ

そして閉じた。

「……無理だ……わけわからん……」

沈む俺を他所に、朱夏の情報公開は続く。そして一番気になる情報が来た。巡崎さんのことだ！

「次にみつちーのこと。あんたはよく知っているでしょ？ だから軽く説明するわ」

「ふぐー！」

俺の心が悲鳴を上げる！ 傷口をナイフで抉られるような、そんな痛みを感じるー……実際にされたことはないけど。 「彼女はおつとつとしていて、優しく人当たりもいい。誰からも慕われ、先生方からの信頼も厚い」

「そつなんだよ。巡崎さん、誰にでも優しいし、おひとり見て見てい和むんだよなあ……。

「部活は美術部で、昨年の清桜展で、銀賞を受賞。テレビでインタビューも受けてるわ。……チートレベルな子ね……」

清桜展と言つのは、俺たちが住んでいるこの町を中心とする地域、清桜市が主催する絵画コンクールのことだ。

プロアマ問わず、毎年一千以上の作品が応募されてる、国内でも屈指の絵画コンクールなのだ。このコンクールを足がかりにプロに向する画家だつて少なからずいるほどである。

「巡崎さんって、やっぱり天才なんだな……。

「ちなみにスリーサイズは上から 」

「なぬ！？ そこまで調べてるのか！？ 恐るべし朱夏！
さあ、早く続きを！」

「 なんてさすがに調べてはいけど」

「 ですよねーーー！」

「 彼女の好きなタイプは …… ププツーーー！」

「 そこ笑うところーーー？」

「 男として一番気になるところだぞーーー！」

「 だつてさ、好きなタイプつて。すばり公太みたいな人だつて」

俺の中で何かが崩れ落ちた。

「いやー、あなた達って本当にお似合いなカップルだったのよね～。
少しでも主人公時間があればね～」

「はううつーー！」

やつぱりそうだったのか！ どうしよう、涙が止まらない…………！
あの告白のときはまだ、彼女は俺のことが好きだったんだ……！
それなのに！ 僕に主人公時間が残つてなかつたばかりに！
なんたる不幸だ！

「ほらほら公太、よしよし、良い子だから泣き止みなさい」

朱夏はポケットティッシュを取り出し、俺の鼻にティッシュをあ
ててくれる。

「ほら、チーンなさい」

「チーン」

何故だろう、今はやけに朱夏が優しい……。

「…………”優しい姉の役”ってのも意外に悪くないわね…………！」

「…………って、おい！？」

ここで性格コスプレを試してたんですか！？ 性格”悪魔”の間
違いだろ！？

「でも公太。これだけは覚えておいて」

……朱夏つて唐突に真剣な顔になることがあるよなあ。そういう
ときは大抵大切なことを言うんだ。

「公太がこれから行う脇役は、」の程度で泣いていられるほど簡単なことじゃない

「自分が本気で惚れた人を、他の誰かとくつつけるの。それは多分、想像を絶するほど心の痛みを伴う。

「あなた達が過去、互いにどう思つていようと一切関係ない。あなたはもう主人公じゃない。彼女とは一度と恋愛できない」

「理解しなさい。これは公太がもう一度主人公になるための代価。こんなに大きな代価を支払うんだもの。失敗は許されない。だから

「

「 本気でやりなさい。公太 ！」

朱夏の鋭い言葉。だがその言葉は、想像以上に優しいものだつた。俺を気遣う暖かさを、言葉の中に感じることが出来た。

それを聞いて尚、落ち込んでいるほど、俺は弱くない。……はず！

「朱夏の言うとおりだな……。俺はこれから一人の脇役にならないといけないんだよな。ならこの程度で泣いてなんかいられないな」

「そうよ。辛いでしょうけど、主人公に戻るために頑張りなさい」「そうだな。俺はまた主人公にならないといけないんだ！」

涙を拭つて決心する！

「ありがとうな、朱夏！　おかげで元気が出たぜ！　今ならどんな役だらうと演じきれる自信があるぜ！」

「その意気よ！」

朱夏の激励は、俺の心を燃え上がらせた！！　やつてやるぜ！
目指せ、助演男優賞！！　うおおおおおおつ！！　燃えるぜ！！

「…………」後輩を励ます先輩の役”つてのも、結構ありね……フ
フフ…………

俺の心は今、灰になつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7768y/>

俺こそが名脇役！

2011年11月26日20時56分発行